

歌手になりたい

作・前田耕陽

どこかの屋敷の音楽室みたいなところ  
ピアノが部屋の中央に置いてある  
その横にパイプ椅子2個

明転すると男2人が向かい合って座っている

有村 「先生、お願いします！歌いたいです。プロとして、一人前の歌手として、人前で歌える様になりたいんです。」

先生 「歌いたって言うてもねー、僕は君の歌を聞いたこともないし・・・そもそもなんで僕の所に来たわけ？」

有村 「えーと、先生は何人も歌手を育ててらっしゃるし、先生が指導した歌手の皆さんはすごい売れてるじゃないですか？演歌からポップス、ロックまでジャンルを問わずミリオンヒットを連発してらっしゃるじゃないですか！」

先生まんざらでもなく、得意げに

先生 「まーねー」

有村 「だから俺も、歌うならまずは先生の指導を受けて、人前に出ても恥ずかしくないようにしてからだなって、それに先生の指導を受けたとなったら、デビューも早いんじゃないかなと思います・・・」

先生 「いや、あのね、僕の指導を受けた子達、全部が全部売れてるわけじゃないんだよ。売れてる人達は、みんな人並み外れた努力をしてるんだよ。」

有村 「そんなことは解ってます。努力もしますし、歌手になれるのなら何だってします。」

先生 「ふん、僕の所に来る子はみんなそう言うんだよね。そのくせチヨット厳しいこと云うとすぐに逃げ出すんだよ。そのほとんどが、君みたいに何のアポも無しに突然訪ねてくる子だよ。君もその子達と同じ匂いがするね。」

有村 「そんなことないですー！」

先生 「・・・じゃー、一つ聞いて言いかい？君はなんで歌手になりたいのかね？」

有村 「歌手になりたいからです。」

先生 「いや、それはそうだろう、歌手になりたいから歌手になりたいんだよね。だからどうして歌手になりたいと思ったのかね？」

有村 「・・・」

先生 「なんかあるだろう？きっかけが、歌手になりたいと思った瞬間が？」

有村 「……………」

先生 「たとえば誰かのコンサートを観に行つてすごく感動して僕もこんな風になりたいと思  
いましたとか、ただ有名になりたいから歌手になりたいと思いましたがさ。」

有村 「……………」

先生 「何だつて良いんだよ、動機が知りたいんだよ。単純なことでも何でも良いから動機を  
教えてよ。」

有村 「……………」

先生 「ほらね、君には何にも無いんだよ、歌手になりたいという思いがね。歌手として売れ  
てる人達つて言うのは、これこれこうだから歌いたいですと言う強い思いがあるん  
だよ！歌で人に感動を与えたいとか、自分の歌で人に笑顔になつてもらいたいから、  
1人でも多くの人にそう思ってもらいたいからと言う強い思いがね、君にはそんな  
思いがないんでしょう？だつたら無理だよ。まー歌でも歌つてテレビに出れたら女の子  
にもてるかな？ぐらいの気持ちでしょ？まあーそれはそれで立派な動機だけだね。で  
もさ、君にはそれすらないでしょ？そういう人がただ歌つても、人に何かを伝える  
ことはできないんだよ。何の思いもない人には指導できないから、悪いけど帰つても  
らえるかな。」

有村 「……………」

先生 「せっかく来てもらったのに悪かつたね……………」

有村 「母ちゃんが……………」

先生 「……………」

有村 「母ちゃんが言ったんです。」

先生 「なんて？」

有村 「お前は歌手になるつて。」

先生 「ん？」

有村 「お前は大きくなつたら素敵な歌手になるよつて、小学生の時、音楽の時間に習つた  
歌を家に帰つて母ちゃんに聴かせると、いつも笑顔で、(マー君、歌うまいね)、マー  
君の歌を聴くと母さんすごく元気になる。マー君は大きくなつたら歌手なればよい  
よ！つて言つてくれてたんです。お母さんはマー君の歌つてるところが大好きだよ  
つて、だから……………」

先生 「だから歌手になりたい？」

有村、満面の笑みで

有村 「はい！」

先生 「いや、あのね、親は誰だって子供が歌を歌ったら褒めるでしょ。自分の息子にお前歌下手だな？なんていう親御さんはいないでしょ？私だって娘が歌を歌ってたら、たいしてうまいと思わんが良いね、上手だね」と言っただけ褒めてあげたりするんだから。」

有村 「違うんです。」

先生 「何が？」

有村 「母ちゃんのは違うんです。」

先生 「違うって？」

有村 「母ちゃんは寝る前に必ず僕に歌を歌ってくれと言ってたんです。毎晩毎晩、もう何回も聴いて飽きてると思うのに、寝る前になると必ず僕に歌を歌ってと頼むんです。僕が歌つと母ちゃんは喜んでくれるので、僕も母ちゃんが喜ぶならと何度も何度も歌ったんです。ドナドナを……。」

先生 「ん？ドナドナ？」

有村 「はい！」

先生 「ドナドナって？」

有村 「ドナドナです。」

先生 「あのドナドナ？ドナドナドナドナドナドナドナドナドナドナ？」

有村 「ええ、子牛が売られるあわです。」

先生少し考える

先生 「うん……。」

有村 「……。」

先生 「なんでだ？」

有村 「……。」

先生 「何でドナドナなんだ？」

有村 「はい？」

先生 「いや、君のお母さんは何故そんなにドナドナを聴きたがったのかな？と思ってね。」

有村 「いけませんか？」

先生 「いや、いけなくはないんだけどね、ドナドナって言うのは悲しい歌でしょ。日本語の歌詞では子牛が売られていくと言う歌詞が付いているけどね、元々はナチスドイツの迫害を受けて収容所に連れて行かれ、大量虐殺にあうユダヤ人のことを歌った歌と言

われてるんだよ。そんな悲しい歌を毎晩子供に歌わせて喜ぶか……」

有村 「はい、その頃は一番好きな歌だと、この歌を聴くと子供の頃を思い出します。と言っていました。」

#### 少しの間

先生 「お母さん何人？」

有村 「はい？」

先生 「日本人？」

有村 「ええ、何ですか？」

先生 「いや、別に……」

有村 「ドナドナ歌つといけないんですか？」

先生 「いやいや、そんなことはないんだけどね、子供に歌を歌ってもらうんならもっと楽しい歌を歌ってもらうんじゃないかなと思ってね……」

有村 「そうなんですか？」

先生 「いやいや、僕だったらね、うん」

有村 「えくと、うちの田舎、牧場やってるんでそれでだと思えます。じいちゃんが子牛売ってたんで自分が子供の時のことを思い出してたんだと思えます。」

先生 「なるほごね」

#### 短い間

有村 「で、僕に歌を教えてくださいただけるんでしょうか？」

先生 「うん……」

有村 「お願いします。」

先生 「なんか弱いんだよね、さっきも言ったけど歌いたいと思う動機が弱いんだよね。」

有村 「弱いんですか？」

先生 「弱いでしょ！お母さんに歌手になれるねと言われたから歌手になりたいなんて、そんな動機で歌手になれるんだったら日本人の3分の2が歌手になってるよー！」

有村 「でも……、約束したんです。俺絶対歌手になって日本一のドナドナを母ちゃんに聴かせるからねって……、だからはややく早く日本一の歌手になって母ちゃんに聞いてもらいたいです。時間が無いんです。」

先生 「ん？時間が無い？お母さんは病気が何かなのかい？」

有村 「いえ、元気です。田舎でじいちゃんの後を次いで牧場やっています。」

先生 「時間が無いって言うのは？」

有村 「僕に時間が無いんです。」

先生 「君に？……………」

有村 「はい。」

先生 「えっ？君が病気なの？」

有村 「いえ、至って健康です。」

先生 「じゃー、時間が無いって言うのは？」

有村 「来年30歳ですから」

先生 「……………」

有村 「30までに日本一の歌手になると決めたんです。お願いします。もう先生しかいないんです。」

先生 「ふーん…………じゃー今まで何してたの？」

有村 「バイトしてました。」

先生 「バイト？」

有村 「はい、18の時からからずっと…………カラオケボックスでバイトしながら空いてる時間に歌の練習してました。」

先生 「なるほどね。」

有村、極限まで先生に近づいて

有村 「お願いします。本当にお願ひします。うんと言ってくれるまで離れませんから！」

先生 「近い近いー近いよ君、近すぎるよー、離れて、もう少し離れて、可哀しいでしょこの距離感。」

有村、更に近づき

有村 「ジャー指導してくれるんですね？教えてくれるんですね？」

先生 「わかった、解ったから、離れて、落ち着いて………」

有村、離れて

有村 「ありがとうございます。」

先生 「全く強引だな」

有村 「で、どうしたら良いですか？」

先生 「どうして？」

有村 「どこをどうすればもっと良くなりますか？」

先生 「??????」

有村 「先生！」

先生 「いや、あのー……君の歌を聴いたことないからなんとも言いようがないね、うん。」

有村 「ちえっ」

有村、軽く舌打ちをする

先生 「チエってなんだよ！チエって！だってそうでしょ！歌を聴いたこともない人に、君の

歌はここが可笑しいよ、なんて言えないでしょ……」

有村 「そうなんですか？」

先生 「そうだよ、そんなの小学生の子供でも解ることですよ。じゃーほら、とりあえず僕が

ピアノで伴奏するから、それに併せて歌ってみて。」

先生ピアノでドナドナを弾き始める。

が、歌が始まって有村は一向に歌おうとしない。

先生 「どうした？」

有村 「……」

先生 「もう一回行くよー」

先生もう一度ドナドナを弾き始める

それでも歌わない有村

先生 「なに？どうして歌わないの？」

有村 「だめです。歌えません！」

先生 「だめって……歌手になりたいんですよ、僕の指導を受けたいんですよ？」

有村 「はいー！」

先生 「じゃーなんで歌わないの？歌わないと君の力量が解らないでしょ？」

有村 「はい。」

先生 「ジャーもう一回行くからね、今度はちゃんと歌ってよ！」

先生、再度下ナドなのイントロを弾き始める  
すると有村が突然大声で

有村 「だめです！」

先生 「わく、びっくりした！なによ！いきなり大声で？」

有村 「この歌はだめなんです」

先生 「なんで？」

有村 「ドナドナは母ちゃんにしか歌わないって決めたんです。」

先生 「母ちゃんにしか歌わないって、ジャーどうすれば良いの？歌が聴けなきやどうにもできなないんだよ？」

有村 「別の歌にしてくださいー得意な歌があるんです。」

先生 「別の歌？何が歌えるんだい？」

有村 「OH MY LITTLE GIRLだよ。尾崎豊や2人の。」

先生 「尾崎豊ね。はいはい、尾崎豊あったかな？」

先生ピアノに積まれた沢山の楽譜から尾崎豊をだす。

先生 「あったあった、えーと、曲名は何だっけ？」

有村 「OH MY LITTLE GIRLだよ。」

先生 「OH MY LITTLE GIRLね、あったあった。これね、ジャー行くよー！」

有村 「はい、お願いします。」

先生ピアノを弾き始める。

イントロが終わり曲中に入っても有村は歌わない  
とずっとより歌えない

先生 「ん？どうしたの？何で歌わないの？別にこの歌は母ちゃんと約束してないんですよ？得意な歌なんでしょ？」

有村 「はい。」

先生 「じゃくなによーちゃんと歌ってよー！」

有村 「すみません、チヨット緊張してしまいました。次はちゃんと歌いますから！」

先生 「もう、頼むよ！ジャーもう一回行くよ！」  
有村 「はい、すみません。」

先生又イントロを弾き始める。  
しかし歌が始まった後も有村は歌おうとしない。  
と言うより歌えない。

先生 「何？何で歌わないの？」

有村 「すみません、ハイって言うってもらえますか？」

先生 「は？」

有村 「歌が始まるところでハイって言うてもらえますか？」

先生 「え？なんで？」

有村 「いや、どこから歌えば良いのか解らなくて？」

先生 「え？なんで？だって君いつもカラオケで歌ってるんでしょ？得意な歌なんだよね？」

有村 「はい、得意な歌です。」

先生 「ジャー何回も歌ってるんだよね？何で入り口がわからないの？」

有村 「入り口？入り口って何ですか？」

先生 「入り口は入り口だよ！歌いだし！」

有村 「アゝ歌い出しですね！……その……ちヨット解りづらかったもんで……」

先生 「解りづらくないでしょ。譜面通りに弾いてるんだから！」

有村 「いや、カラオケだいつも歌が始まる前に手のマークが出てハイって教えてくれます

から……」

先生 「はあ？ いや、あのね、歌手の人で歌う前にハイって言わなきゃ歌えない人なんて聞いたことないでしょ？ジャー何？君はいつも歌うときその〴〵カラオケの画面を見ながら歌ってるのかい？そのハイが無いと歌えないのかい？画面を見ないで歌ったことないのかい？」

有村 「そうですね、画面見ないで歌う人なんているんですかね？」

先生 「いるだろう！私はカラオケには行ったことないから解らんがね、それに歌手を指してる人で歌の入り口でハイと言わなきゃ歌えない人なんて見たことないよ！とにかくこの歌はイントロが4小節だから4小節聴いたら歌って！あゝ小節解る？」

有村 「小節は解りますよ！音楽の授業で習いました。」

先生 「じゃーいいね、4小節だからね。」

有村 「はい、4小節ですね」

先生再びイントロを弾き始める

有村指を折りながら小節を数える

歌頭で何とか歌い始めたが何かおかしい！

先生 「ん？なんだ？ちゃんと数えた？」

有村 「はい、4小節ですよね？1, 2, 3, 4, 2, 2, 3, 4, 3, 2, 3, 4, 4, 2,

3, 4ですよね？で5の時に入るんですよ？」

先生 「そう4の裏ね！」

有村 「？」

先生 「ジャーもう一回行くからね」

有村 「裏とは？」

先生 「裏だよ、四拍目の裏！」

有村 「だから裏って何ですか？」

先生 「え？何？裏が解らないの？・・・しょうが無いな、1, 2, 3, 4と数えるでしょ、

その間にトと入れたらどつなるっ？」

有村 「1ト2ト3ト4トですか？」

先生 「そつそつ、そつだよー1ト2ト3ト4トのそのトの部分の裏って言うのね！解った？」

有村 「は？」

先生 「ジャー数えてごらん」

有村 「1ト2ト3ト4ト2ト2ト3ト4トですね。」

先生 「そつそつ、ジャー僕が手をたたくから君は裏で手をたたいてみて？いいね。」

先生リズムに合わせて手拍子を始める。

先生 「サー裏で入って！」

有村チャレンジするが先生の手拍子につられてなかなかうまくいかない

何度か繰り返すが全然できなくて切れる有村

有村 「あくもう！腹立つ！なんっすかこれ！」

先生 「いや、何怒ってるの？これぐらい普通にできなきゃー！」

有村 「あのね先生、俺は歌を習いに来たの！変な手拍子するために来たんじゃないの、なん

だ1ト2ト3ト4トってー！」

先生 「いや、これ基本だから、これできないなら歌なんて無理だよ！だいたい君、裏も感じられないでよく今まで歌ってこれたね、カラオケボックスで何練習してたの？誰に習ってたの？」

有村 「DAMのカラオケオーディションです。」

先生 「は?????」

有村 「ダムのカラオケオーディションでは八五点以下出したことありません。」

先生 「何だ？そのカラオケなにかしって言うのは、君は僕を馬鹿にしてるのか？」

有村 「なんで馬鹿にするんですか？」

先生 「そんなところで歌って、なんだかしらんゲームみたいな物で良い点数が出たからって歌手になれると思ってるか？裏打ちもできない奴が何が歌手になるだよ！舐めすぎだよ！君は今歌を歌ってる歌手の人達や本気で歌手を目指してる人達を馬鹿にしてるよ！悪いことは言わないから今すぐ帰りなさい！」

有村 「……………」

先生 「いいか、本気で歌手を目指す人って言うのは四六時中歌のこと考えてるんだよ、ボーイストレーニングを受けたりリズム感を養ったりしてるんだよ！カラオケで点数が良いからデビューさせてくれ？ふざけんよ！今すぐ出て行け！」

有村 「いやですー」

先生 「いいから出て行け！」

続く